様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22500694
研究課題名（和文）　死生観を基盤とした人間関係育成教育の構築
研究課題名（英文）　Construction of Human Relationship Education Based on View of Life and Death
研究代表者
得丸　定子（TOKUMARU　SADAKO）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：00293267

研究成果の概要（和文）：主な成果として、以下の 3 点が挙げられる。(1)高齢者へのインフォーマルケア実践で、QOL の向上、健康意識の向上、プログラム参加を通じ人間関係の「張り合い」を感じていることが示唆された。 (2)児童への「地域資源活用型教育」実践として、学校長期休業時における児童の居場所づくり・人間関係育成教育を行い、地域住民に歓迎された。(3)地域伝統・文化資源活用型教育として、寺院等を会場にした教育的意義が確認された。

研究成果の概要（英文）：Three points summarize our results: (1) Informal care for senior people increased their QOL and health consciousness, and encouraged their feelings of social interaction. (2) The community welcomed our Children's Local Resource Rooms for giving children a sense of belonging and teaching them human relationships when school was out of session. (3) We confirmed the value of using temples as locations for education about local traditions and cultural resources.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学、生活科学一般
キーワード：人間関係、死生観、世代間交流、地域文化、子ども、高齢者

１．研究開始当初の背景

平成 18 年 12 月に教育基本法が改正され、それに対応した新学習指導要領が平成 21 年から小・中学校で、その一部が先行実施されている。

今回の教育基本法の主な改定点は 2 点で、第一点目は「教育の目標（第 1 章第 2 条第 5 号)」で「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」との新たな内容である。

第二点目は「教育の実施に関する基本（第 2 章第 15 条)、宗教教育」で、「宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上尊重されなければならない」である。

これらの改正の流れとして教育の方向性が示された背景を受けて、これまで本研究グループが取り組んできた「いのち教育」の発展的研究として取り組んだ。

２．研究の目的

地域資源としての伝統的な人間関係のネットワークと死生観教育の場を見直すことを目的とした。具体的には、子どもと高齢者、

地域住民との関係の再構築を試み、高齢者のQOL を高めると同時に、子どもの人間関係育成を目指す教育モデルを構築・実践する事を目的とした。

３．研究の方法

方法はフィールドワーク研究であり、以下の点について研究を進めた。

(1) 日本人の死生観、世代間交流に関する先行研究の整理、上越地域の伝統・文化の情報収集。

(2) 上記(1)で得られた資料・情報・結果を基に、人間関係育成プログラムを構築し、その実践と評価を行う。

(3) プログラムの評価方法は、高齢者には、健康関連 QOL を評価する EQ-5D、主観的健康感、主観年齢を用いた。また、主観的嗜好アンケートも実施した。児童・生徒における本プログラム評価は、絵日記の文章記述部分のテキストマイニング分析を行った。数値データ分析は、js-STAR2012 ver.1.0.1j での正確二項検定、サイン検定、形態素解析構文解析を行い、テキストデータ分析は TTM: TinyTe、xtMiner β version, mecab-0.994, cabocha-0.64, R ver.2.15.2, Exclle2010 を用いた。

４．研究成果

本研究成果は 5 点あげられる。まず、1 点目は、「死生観」という言葉の概念規定を行い、そのうえで、高齢者と子どもの死生観教育の試論を提示した(藤腹が担当)。2 点目は、死生観に基づく人間関係構築として、特に「葬儀」に焦点をあてたスピリチュアルな面からの試論を展開した（坂井が担当)。3 点目として、アノミー的な現代の日本の若者の精神状況と似た状態にある中欧チェコでの、歴史教育における「死生観に基づく人間関係教育」の事例を提示した（郷堀が担当)。4 点目では、人間関係を築く前提とも考えられる「生きる力」を増進させるためのストレス低減効果があり、また超自己的な感性の涵養が得られるとも考えられるマインドフルネス瞑想の実践とその評価を試みた（得丸が担当)。5 点目は、地域資源、特に地域の伝統文化資源と人材資源を用い、高齢者と子どもの世代間交流に視点を置く、生きがい感・人間関係育成の調査・実践の報告である（奥井が担当)。

詳細な報告については、紙面の関係上、5 点目の奥井の報告を中心に以下に記す。

「死生観を基盤置く」とのキーワードに対応する内容として、地域文化・伝統資源である寺院との連携や、空き店舗の活用、地域の歴史遺産・自然を取り入れる実践研究を行った。「人間関係プログラムの構築」については、高齢者と子ども、子ども同士、地域住民と子どもとの交流に視点を置き、地域資源（主に場所と人）を活用した子どもへの人間関係育成涵養を促すことをめざすプログラムを構築した。さらに、そのプログラム実践に対する評価も行った。

本研究グループは、研究初年度である 2010 年度以前からフィールド開拓を行い、これまでに高齢者を対象にした「地域の茶の間」(地域の高齢者が気軽に集まり交流できる場）実践は通算 203 回、児童を対象にした「人間関係育成プログラム」実践は、通算６回（24 日間）開催してきた。

まず、本研究の主な成果の要約 3 点を以下に記す。

・高齢者へのインフォーマルケア(IC)実践で、QOL の向上、握力の維持、健康意識の向上等が達成され、プログラム参加を通じ人間関係の「張り合い」を感じていることが示唆された。

・児童へのノンフォーマルケア(NC)として、「地域資源活用型教育」実践で学校長期休業時における児童の居場所づくり・人間関係育成教育の試みを行い、地域住民に歓迎された。

・地域伝統・文化資源活用型教育として、寺院等を会場にした教育的意義が確認され、地域住民による地域伝統・文化施設利用の再考が促進された。

以下に上記の詳細な結果を記す。

(1) 高齢者に対するインフォーマルケア実践評価

EQ-5D で「不安・ふさぎ込み」に関する項目においてのみ、利用者 6 名全員がレベル 1 に改善された(p=.031, 両側）（表 1-1、1-2)。

表 1-1 利用者の年齢と EQ-5D の測定結果

no.	利用者	性別	年齢		EQ-5D				サイン検定
					生データ ※		効用値		
			pre	post	pre	post	pre	post	
1	A	女	85	86	2,1,1,2,2	2,1,2,2,1	0.631	0.649	up
2	B	女	85	86	1,1,1,3,1	2,1,1,2,1	0.654	0.693	up
3	C	女	84	85	2,1,1,2,1	2,1,2,1,1	0.693	0.730	up
4	D	女	90	91	1,1,1,2,2	1,1,1,1,1	0.705	1.000	up
5	E	女	83	84	2,1,1,1,1	2,1,2,2,1	0.774	0.649	down
6	F	女	85	86	2,1,1,2,2	2,1,2,2,1	0.631	0.649	up

※「生データ」欄に記載されている数値は、「移動の程度」,「身の回りの管理」,「普段の活動」,「痛み・不快感」,「不安・ふさぎこみ」で得られたレベル値を並列に記載している。例)「利用者 A」の場合、「不安・ふさぎ込み」が、「pre:レベル２」から「post:レベル１」に改善している

表 1-2　年齢と主観年齢・主観的健康観

no.	利用者	性別	年齢		主観年齢		サイン検定	主観的健康感		サイン検定
			pre	post	pre	post		pre	post	
1	A	女	85	86	86	86	―	55.2	48.3	down
2	B	女	85	86	86	87	up	93.1	82.8	down
3	C	女	84	85	84	85	up	72.4	55.2	down
4	D	女	90	91	90	90	－	76.6	91.0	up
5	E	女	83	84	80	84	up	76.6	60.0	down
6	F	女	85	86	85	86	up	58.6	44.8	down

プログラム内容の主観的嗜好については、「午前のお茶のみ話」「昼食」で、高い嗜好が示された(p=.019, p=.063, 両側)（図 1)。利用者同士・スタッフとのコミュニケーションが、利用者の「不安・ふさぎこみ」に望ましい影響を与えている可能性があると考えられる。

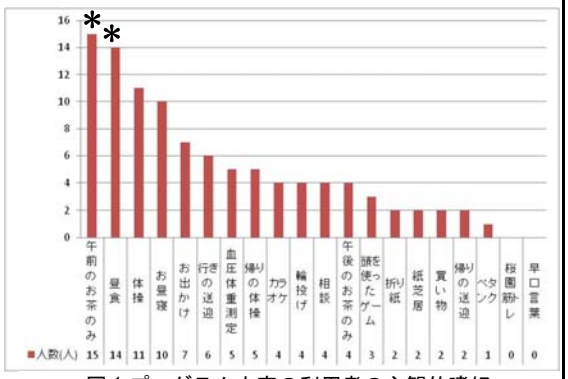

図 1 プログラム内容の利用者の主観的嗜好

今後、事後調査時に実施したインタビュー調査の質的分析によって、本報の結果と利用者の抱くケア選好との関連等についても追究していく。本報の限界は、比較対照群がないこと、女性高齢者が中心であること、対象が小規模であることであり、限定された範囲での考察にとどまっている。

しかし、こうした限界を踏まえても、「N の里」にみるような IC 実践の効果が今後広く認められれば、公的な福祉関連財源を圧迫しない形での高齢者ケアが実現でき、超高齢社会が抱える諸課題に対する解決への一役を担う実践として期待できると考える。

(2)児童へのノンフォーマル教育実践評価

学校長期休業時における児童の居場所づくり・人間関係育成教育実践の最終日に、児童に絵日記を書いてもらった。その絵日記の記述部分について、クラスター分析 （階層的クラスター、ユークリッド平方距離、ward 法）を行った。カットラインを 4.0 で設けたところ３つのクラスターが抽出され、それぞれ「学習活動意欲」「内的充実感」「遊び嗜好感」と命名した(図 2)。

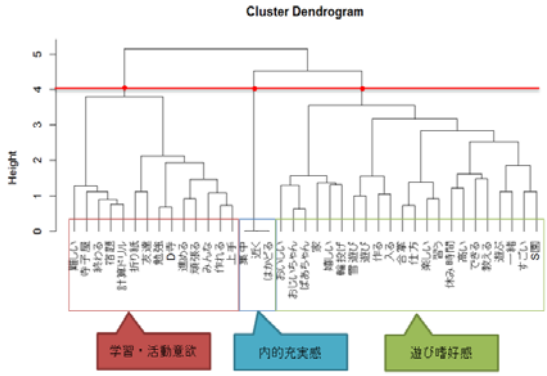

図 2 絵日記から抽出された主な単語とクラスター

この結果から、児童は、学習面と遊びについて様々な感情や意識を抱いており、特に、第２クラスター「内的充実感」では、「集中」、「はかどる」等の単語がみられ、学習面で高い効果があったことが伺える。「F さんと一緒に勉強して楽しかった」、「いつもと違う雰囲気で勉強できて集中できた」等、参加者間の共有空間が功を奏していたことが伺えた。

また、多次元尺度構成法により得られた用語の布置から、「遊び-学習」を構成する「活動内容軸」と、「N の里-寺院」を構成する「会場環境軸」と考えられる有意な軸が見出された(図 3)。

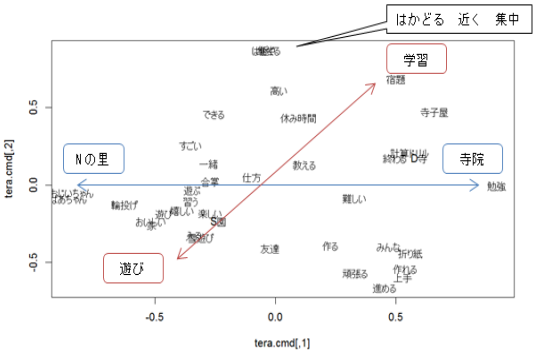

図 3 絵日記から抽出された主な単語とその布置

児童は、高齢者との遊びや、友だち同士、スタッフとの交流を通じて、「嬉しい」、「楽しい」、「すごい」といった肯定的な感情を有していた。学習場面においては、会場(寺院・Nの里)の雰囲気を感じながら、充実した学習ができたと自覚していることが読み取れた。

これらの結果から、児童の人間育成には、学習面と遊びやレクリエーション活動を取り入れることの重要さが確認された。また、今回のプログラムでは、子どもは多様な世代、つまり、N の里スタッフ（40～60 歳代）や、大学生や高校生等、高齢者(80～90 歳代)等、多様な世代と関わったが、高齢者との世代間交流についての記述が多かったことから、本プログラムの１つの目的である世代間交流が、児童の「人間関係育成」において効果的であることが示された。

(3)児童・保護者・学校教員によるプログラム評価

直接的にはプログラムに関わっていない保護者や、参加児童の多数が通っている近隣小学校（J 及び H 小学校）の教員の抱く本プログラムへの認識について自由記述アンケート調査を行った。

その全体記述をテキスト化し、クラスター分析 （階層的クラスター、ユークリッド平方距離、ward 法）を行い、カットラインを 3.5 で設けたところ、４つのクラスターが抽出された（図 4)。「第１クラスター：保護者」、

「第２クラスター：教員①」、「第３クラスター：教員②」、「第四クラスター：児童と保護者」と命名した。

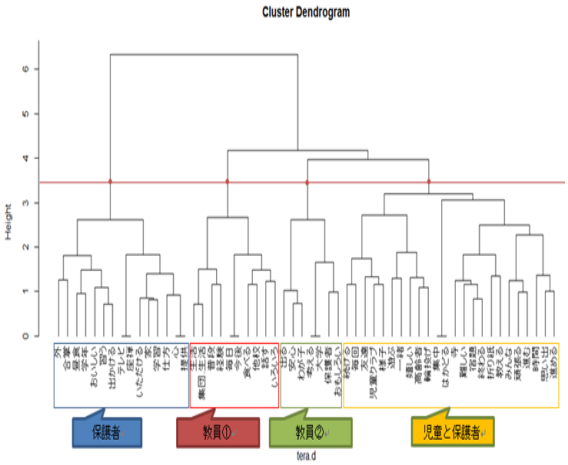

図４　児童・保護者・教員のテキストデータから抽出された主な単語とクラスター

第１クラスターにおいては、「いただける」「提供」等の保護者の立場からの語が頻出した。また、寺院で習った「合掌」や「座禅」についての記述も含まれており、家庭内で児童が保護者に本プログラム活動の話をし、保護者の記憶にも残っていることが読み取れた。

第２・第３クラスターについては、教員が、児童の立場（第２クラスター）と保護者の立場（第３クラスター）を意識していることが分かった。前者からは「他校」、「体験」といった単語、後者からは「わが子」、「安心」といった単語からそのことが伺える。

第４クラスターは、保護者及び児童の記述で形成されており、児童が絵日記に記した内容や、児童から聞いた話についての保護者の回答記述が多くみられた。本実践への参加を通じて、家庭内のコミュニケーションが図られたことが伺えた。

次に、同様のデータについて、各対象者（児童・保護者・教員）の回答にどのような特徴があるかを調べるため、対応分析を実施し、布置グループ別に「X1=児童」、「X2=保護者」、「X3=教員」と命名した（図５）。

対応分析は、意味のある２次元上に各単語がプロットされる。ｘ軸には、実践に参加した児童が左側に布置され、保護者が対極に位置していることから、実践に関する「主観-客観軸」と定義した。教員の布置は、児童と保護者の中間的な位置であることが分かる。これは、クラスター分析でも、教員が児童の立場及び保護者の立場からの認識をもっていることからも納得できる。

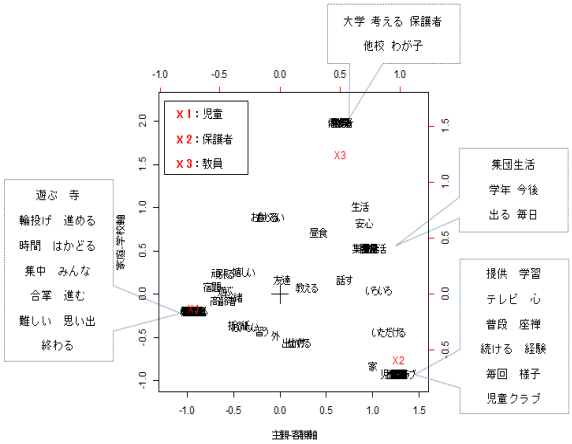

図５　児童、保護者、教員のテキストデータ対応分析得点結果の散布図（２次元解）

ｙ軸の解釈として、保護者が下部に、教員がその対極に位置していることから、「家庭（私）-学校（公）軸」と定義した。プログラムに参加したそれぞれの立場が具体的な語と共に布置されていることが分かる。児童の周辺には、感情や、具体的場所、活動内容が、保護者の周辺には、具体的な内容と共に、客観的な立場からの所見と考えられる単語が布置されている。一方、それらの中間的な視点から、教員は、両者の立場で、本実践を俯瞰的に認識していることが分かった。これらの結果は、筆者をはじめとする運営側にとって、実践内容を検討していく上での有効な情報であり、今後は、それぞれの立場からの認識の違いを理解した上での方策検討をしていくことが望まれる。

(4)課題

まず、プログラム内容面では、現時点は女性高齢者を主眼に置いた内容であるが男性高齢者をも視野内においたプログラムの検討が求められる。男性高齢者の研究協力者が少数であることから、男性利用者データの統計的検定や一般化が困難であるが、類似実践をいくつか共同研究の形でまとめることで、調査対象者数の少なさの課題はクリアできる。しかし、地域によってニーズや住民の実態が異なることが考えられ、ハードルは高い。

次に、プログラム継続性の観点から、コミュニティビジネス体系の構築や、スタッフの世代交代等を視野に入れた運営の継続が課題である。この点は、本研究テーマを超える課題であるが、「地域の茶の間」に類する実践においては、全国的に共通かつ重要な課題である。

３点目として、運営面での継続体制の構築が挙げられる。特に、児童及び、保護者からの継続性及び、実践の長期的実施の要望は強く、今後は、受け入れ態勢を調整し、この点を視野に入れ展開していくことが必要であ

る。内容的な改善と並行して、運営面における課題の克服も視野におき、地域住民との協働を強化していく必要がある。

本報では、人間関係育成教育の視点から、一定の成果を挙げる結果を得ることができた。今後は、得られたデータや資料を参考として、より一層の実践内容の充実を図り、それらを支える IC の基盤を強固にしていく必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３９件）

① 郷堀ヨゼフ、小菅江美、得丸定子、森の中で生と死を考える―野外保育の実践に関する死生学的な考察―、上越教育大学研究紀要(査読有)、第32号、309-316、2013.
② 坂井祐円、縁起の思想から見たケアの関係性、京都大学大学院教育学研究科紀要、(査読有)、第58号、169-181、2012.
③ 名嘉一幾、郷堀ヨゼフ、大下大圓、得丸定子、学校における瞑想実践とその評価、上越教育大学研究紀要(査読有)第31巻、253-261、2012.
④ 名嘉一幾、得丸定子、世代間交流プログラム実践及び評価の検討～客観的評価としてのストレス度測定の導入～、日本家政学会誌(査読有)、第63巻2号、51-60、2012.
⑤ 藤腹明子、人の“生老病死”と仏教の教えに学ぶ生死観と人間性、真実心（査読無)、第33巻、191-230, 2012.
⑥ 坂井祐円、総括　人間形成における「超越性」の問題、京都大学GCOE研究開発コロキアム論文集、Ⅲ、1-16、2012.
⑦ 郷堀ヨゼフ、異界とのネットワーク～村落社会の高齢者の死生観と近親追慕にみる生者と死者との関係性～、仏教看護・ビハーラ（査読有）、第7巻、135－159、2012.
⑧ 田宮　仁、今、「科学改革」を必要としている、老年問題研究、第25巻、1-3、2011.
⑨ 郷堀ヨゼフ、小正月行事に参加する子どもの行動と意識に関する一考察、日本民俗学（査読有）、265、57-71、2011.
⑩ 得丸定子、「マインドフルネス」と学校教育―ノルウェーと米国の報告―、仏教看護・ビハーラ(査読有)、第6号、167-186、2011.

〔学会発表〕（計８４件）

① 藤腹明子、生きざま、死にざまを決めるのは、個々人の生死観、日本人間性心理学会　第31回大会、2012.9.23、宇部フロンティア大学
② 坂井祐円、人間的成長の根底にある生成の原理―不登校生徒の母親面接の事例を通して―、日本心理臨床学会第31回秋季大会、2012.9.23、愛知学院大学
③ 名嘉一幾、「常設型地域の茶の間」における地域づくりの試み～「ねごしの茶の間」及び「ねごしの寺子屋」実践の評価から～、日本仏教社会福祉学会、2012. 9. 2、京都華頂大学
④ Kazuki Naka, Sadako Tokumaru, Practice And evaluationof the IntergenerationalProgram: Introduction of measuring participants' stress levels as an objective index., International Federation for Home Economics, XXII World Congress, 2012. 7.18, Victoria(Austral)
⑤ 得丸定子、石澤美代子、名嘉一幾、生活技術としてのストレス低減への取り組み―「生きる力」育成を視野に置いた基礎的取り組み―、日本家庭科教育学会第55回大会、2012. 7. 1、東京学芸大学
⑥ 郷堀ヨゼフ、死生学の観点からみた野外保育、第７回　森の幼稚園全国交流フォーラム、2011.10. 29、国立妙高青少年自然の家
⑦ Sadako Tokumaru, Psychological and biochemical evaluation of meditation, 26th Meeting of the International Work Group on Death, Dying and Bereavement 2011,2011.10.25,Melbourne (Australia)
⑧ 名嘉一幾、得丸定子、地域住民による高齢者の健康・生きがいづくり　～Precede-Proceed モデルを活用した住民による自立運営型介護予防プログラムの実践～、日本家庭科教育学会北陸地区会第28回大会、2011. 7. 16、新潟大学
⑨ 郷堀ヨゼフ、名嘉一幾、得丸定子、死者と生者と―こどもたち～日本的死生観を土台にしたいのち教育を探る～、日本家庭科教育学会北陸地区会第 27 回大会、2010. 7. 24、信州大学
⑩ Sadako Tokumaru, Fear of Death and Afterlife - Comparison of Japanese and Korean Students -, British Association for the Study of Spirituality, 2010. 5. 5, Cumberland Lodge (UK)

〔図書〕（計７件）

① 得丸定子、ドメス出版、『生活主体を育む』、2013、109－115.
② 藤腹明子、青海社、『仏教看護入門』、2011、144

６．研究組織

(1)研究代表者

得丸　定子（TOKUMARU　SADAKO）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00293267

(2)研究分担者

田宮　仁（TAMIYA　MASASHI）

淑徳大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：60155257

郷堀　ヨゼフ（GOHORI　JOZEF）

上越教育大学・専修研究員

研究者番号：80611152

(3)連携研究者

藤腹　明子（FJIHARA　AKIKO）

淑徳大学・看護学部・客員教授

研究者番号：90105057

(4)研究協力者

坂井　祐円（SAKAI　YUUEN）

京都大学・教育研究科・後期博士課程学生

奥井　一幾（OKUI　KAZUKI）

兵庫教育大学・大学院連合学校教育学研究科・後期博士課程学生